

一般消費者の木材・木造住宅等の意向調査

福岡県林業試験場 福島 敏彦
福岡県水産林務部 原田 憲之

1. 調査目的と方法

木材の需要拡大対策は、従来供給側の立場である川上の産地を中心に考えられていた。川下の消費者のニーズが多様化している今日、消費者の木材・木造住宅等に対する意識や考え方をしっかりと把握し、そのうえで方策を講ずることが重要になっている。

本調査は、林業・木材産業の後継者が、都市住民に対してアンケート調査を実施したものである。

調査は、家族構成・住居の実態・木材のイメージ・住宅計画等29項目について行った。本報告では、木材のイメージ・住宅を建てる場合の重視点・好まれる建築様式・和室についての考え方について、主に年齢別・男女別に分析した結果を述べる。

調査は福岡県林業研究グループ連合会と福岡県木材青壮年連合会の会員が直接回答者に面接して行った。回答者は男性820人・女性503人・不明1人で、福岡市(380)・北九州市(254)の大都市圏を中心に県下全域で1,324件である。

2. 分析結果

住宅や家具などに使用されている木材のイメージと年齢との関係を見ると、木材にとって良いイメージである「木肌・木目が美しい」「日本人の好みに合う」「暖かい」が、男女とも年齢とともにイメージが強くなる。「ファッション的」は、20～30代で強いイメージがあるが、年齢とともに弱くなる。全般的に高齢者ほど木材の良いイメージが強く、悪いイメージが薄らぐようである。「燃え易い」「価格が高い」「狂い易い」「腐れ易い」の木材として悪いイメージが18.6%と高率であり、今後加工技術の開発とPR活動を進めなくてはならない。男女別で見ると、「木目・木肌が美しい」では、女性の46歳以上ではイメージが弱くなり、全体的傾向と異なる。

住宅を建てる時の重視点を年齢別に見ると、「住みごころ」では、18歳から55歳へと年齢が増加すると回答者の割合が減少し、55歳以上になると増加する。

「使いやすさ」では、家族の中心的役割を果たす36～55歳の年齢層で最も割合が高く、この年齢層より年齢が若くても高齢になっても割合が減少する。

「間取り」では、男女の傾向が全く逆の傾向になる。男性は年齢が増加すると、「間取り」への関心度が高くなる。女性は男性よりも全般的にやや低い関心度となっている。そして、年齢が増加すると、関心度が低くなり、男性と逆の傾向となる。

「耐久性」では、年齢による関心度の変化はあまり見られない。男性では年齢が増加するとやや関心度が高くなり、女性では年齢に関係なく一定である。

「ファッション性」は、25歳以下で男女ともに関心度が高く、25歳以上では急に関心度が減少することから、「ファッション性」は若い世代のみの一過性であると言える。

好まれる建築様式と年齢との関係については、「和風好み」の場合は、65歳までは年齢の増加とともに割合が67%まで増加する。「和風好み」を男女別で見ると、男性の方が女性よりも「和風好み」である。割合が最も増加する年齢は、男性が61～65歳、女性が56～60歳となり、男性の方が5ほど高齢である。夫婦間の通常的な年齢較差を考えると、夫婦間で意志の疎通を図っていることがうかがわれる。

「洋風好み」は、「和風好み」と逆の傾向となり、30歳以下の若い世代で割合が高く37～21%であるが、31歳以上になると割合が8～1%へと減少する。「洋風好み」の傾向は男性よりも女性の方が強いようである。

「和洋折衷」は、「和風好み」と逆の傾向となる。20歳以下では「洋風好み」の割合が高く40%である。21～25歳では68%になり、26～65歳では28%まで減少する。男女別では、男性よりも女性の方が「和洋折衷」を好むようである。

和室に関する考えと年齢との関係では、年齢による考え方の相違が明確にあらわれてるようである。

「和室はいらない」では、18～20歳が9%であり、年齢の増加とともに減少し、35歳以上になると1%前後となる。

「和室は1～2部屋あればよい」は、20～60歳の間で

41%から9%に減少し、61歳以上の二世世代家族になると、若い世代の意見を取り入れたものとなって和室の割合が減少する。

「二間続きになった和室がほしい」は、各年齢層で高い割合を示すが、特に56歳～60歳で56%と高い割合を示す。この年齢層よりも年齢が増減すると割合は減少する。

「和室中心の間取りにしたい」は20歳～25歳の6%から71歳以上へと年齢が増加すると39%に増加する。即ち、高齢になると、和室について消極的になる場合と積極的に二極化して、その中間の「二間続きになった和室がほしい」の割合が減少するようである。

男女別で特徴的なことは、男性の20歳以下で「和室がいらぬ」割合が高く25%である。和室について消極的な「和室は1～2部屋あればよい」では、女性よりも男性の割合が高く消極的である。

「二間続きになった和室がほしい」では女性の割合が高い。和室について積極的な「和室中心の間取りにしたい」では男性の方が女性よりもかなり高い割合と

なり、消極的なものとの二極化傾向を示す。住宅を建てる場合の重視点でファッション性、住みごころ等で高い割合を示す若い女性は和風住宅を希望しても、和室は1～2部屋あればよく、センスのよい洋風住宅を好むようである。

3. むすび

今回アンケート調査は、これまで言われてきた点を数字的に裏付けたものであり、林業・木材産業の後継者が直接都市住民と面接して実施した事におおきな意義がある。

この調査をさらに裏づけて、木材の需要拡大につなげ、消費者のニーズに合った木材の生産、住宅の建設が重要になる。

若い人のニーズが非常に多様化し、木材に対してもファッション性・デザインが求められており、これらに対応した製品・住宅の開発が急務と思われる。

木材のもつ悪いイメージについては若い世代で高く、積極的なPR活動が必要である。

図1. 回答者の性別・年齢別総数

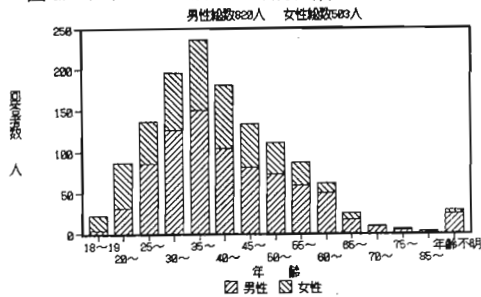


図2. 好まれる建築様式と年齢 (男性の場合)

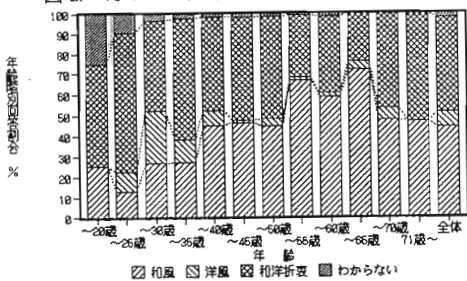


図3. 好まれる建築様式と年齢 (女性の場合)

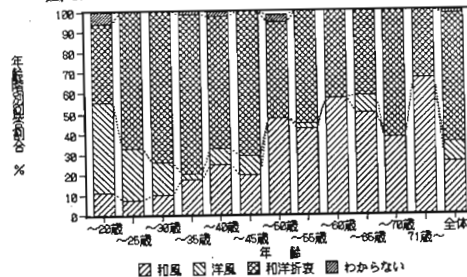


図4. 和室についての考えと年齢 (男性の場合)

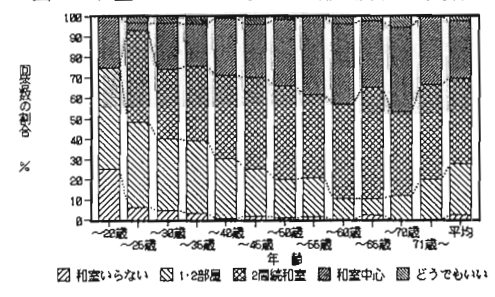


図5. 和室についての考えと年齢 (女性の場合)

